

春燈

十二月号

12

December 2008



安住敦の句

枯れつくすまで鶏頭を立たせおく

『歴日抄』昭和三十四年

「立たせおく」が哀れで胸に迫るものがある。鶏頭の茎は太く、花は可憐とはいえない。枯れるまでその儘にしてある庭をよく見掛ける。その様な情景を突き放した表現で無情さを際立たせ、その奥には枯れてなお立ちつくす鶏頭を思いやる情の深さを読みとれる。

何気ない日常の風景句に、敦先生のお人柄を、偲ばれる思いです。

三宅文子

安住教の句

しんかんとあめつちはあり寒牡丹

句集『柿の木坂雑唱以後』昭和五十八年

一に黙読して上五・中七が仮名、下五が漢字の文字の配列の妙が眼を驚かせ、一に音読してその上・下五字の響き合うリズムが耳を喜ばせます。これらは抒情を重んずる「春燈俳句」の大切な一面だと思えます。

勿論此の句が、深閑な天地の中に確とした存在感を示しながら、余分の主張をしない「寒牡丹」を詠み上げて十分なことは言うまでもありません。

堀内五齡

主宰の句

安立公彦

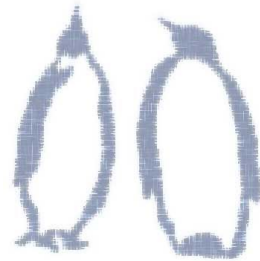
落鮎の己が香氣の中に果つ

竹伐つて天上ひとつ空とせり

近づけば歓喜あらはに曼珠沙華

祈ること多し魯田星に暮れ

水は木を木は風を呼び秋送る



春星賞受賞作（20句）

涅槃西風 片山 博介

高札の湯元の縁起涅槃西風

寒村に間引の哀史しやぼん玉

客死てふ碑文の結び鳥雲に

秀峰の水送る山葵沢

緋の幟野道に続く一の午

春光をのせて蛇行の千曲川

まんさくや間歇泉の噴き上がり

古戦場の雨脚ほそし初桜

強東風の空を睨めつけ鬼瓦

刃文めく遠山脈の残り雪

信玄の隠し湯なりし魚は氷に

鈍彫の仏に供へ五加飯

囀りや蔵の二階の明り窓

春日影大正の玻璃歪みけり

あたたかや絵双紙の色いたく褪せ

湯桶置く音の響ける遅日かな

山の湯の溢れ臙となりにけり

残雪の山鴉色に暮れにけり

春三日月姨捨山の肩に出づ

蕎麦殻の旅の枕や遠雪崩

蓬萊點綴

廖 運 藩

宵闇の灯の矢が撫づる海三つ（鷺鸞鼻灯台）

霧立つや軒丈低き阿美の村

稲妻や榕の走り根瘤だらけ

折敷の八田與一像秋晴るる

施餓鬼会の導師は予科練生き残り

藁塚や旧暦なべて土角建て

粧うて羞花閉月の山の貌（淡水歡音山）

冷まじやサント・ドミンゴ地下宮倉（淡水紅毛城）

登高や昔戎衣の腰手拭

法要の哨^さ吶^との調べ秋闌る

落し水

中村春宵子

風に耐へ寄り添ひ合ふや秋桜
燎原の緋かとも高麗の曼珠沙華
枝折戸をたたく野分や露地の奥
濡れそぼつ七草寺のこぼれ萩
秩父嶺の狭霧晴るるや瀧一丁
里山の棚田千枚落し水
妙高の天狗の庭や草紅葉
唐三杉の馬嘶ゆるや天高き
べつたら市路地溢れたる人出かな
行く秋や橋の袂の里程標

当月集

安立 公彦選



○ 湯上稔子

霧ふかき戸隠奥社詣でけり
信濃路や薄紅さやに蕎麦の花
こぼれ萩魁夷館の庭にかな
虫時雨夜の帳の濃かりけり
校長の渾名洪柿なつかしや

○ 久本久美子

ゆきあひの空に穂をとく芒かな

こぼれ萩背にのせ男門に立つ

秋航やまろき地球を直角に

秋の日の列柱濠に浮かべけり（明治生命館二句）

床にねむるジュラ紀の化石暮の秋

○ 後藤眞由美

水澄むや小さき魚の群れふたつ

くれなゐの萩の先触れ母の忌来

菊月夜残業帰りの道あをし

虫の音に闇ほぐれゆく島泊り

さやけしや梁山泊の喫茶店

○ 池上昌子

ブティックの流行色や秋の蝶

煉瓦造りの交番に降る木の実かな

彼岸花村に特急停まりけり

水天碑田畑豊かに水澄めり

静けさに案山子居眠りしてゐたり

○ 都丸美陽子

秋の山朽木にくくる道しるべ

わが採りし山の茸をふるまへり

縁側をかまきりそろり伝ひゆく

足垂れて釣る子がふたり鱸雲

朝寒や竹刀打ち合ふ体育館

春燈の句

安立 公彦選

吟誦や秩父へつづく罌雲

埼玉 市川 玲子

十六夜に墨磨る影のありにけり

松籟を笙の音となし浜の秋

月清し杜甫諳ずる媼あり(老人ホームにて)

大学のオーブンキャンパス小鳥来る

京 坂本依誌子

金米糖ころげる豊風炉名残

ひのくにの歌をひとふし炉火恋し

有明や都心の隅に酒を売る

秋霖やてるてる坊主逆しまに

神奈川 松山三千江

啄木鳥やバッグひとつの一人旅



引水の厨をめぐる良夜かな

昨日より今日の輝き秋北斗

歳時記を片手に秋刀魚焼く夕べ

蹴り上げるボールの行方天高し

桔梗剪る半袖シャツの父の腕

遠ざかるバイクの彼や爽やかに

秋の街「チャイナ」と問はれ鏡見る

シャンソン聴く小さき秋の喫茶店

秋の川水漬きし草の影深き

千葉 吉村さよ子

馴染みしか年金くらし秋刀魚焼く

東京 横山さくら

余言

安立公彦

んの字の筆致に宿る秋気かな

川崎真樹子

「ん」の字が主役となつている句はめずらしい。

永字八法はよく聞く書法伝授の一つだが、仮名の場合はどうか。「ん」の字を仔細に見ると、それ以外の四十六字とは違つた一字独立の趣がある。しかし「ん」の字がなくては文字は成り立たない。

多分書道展での作だろう。折り返しから右にはね上る「ん」の字の筆致に、作者は爽やかに澄み切つた大氣の感触をたしかに感じたのである。その思いが良く伝わつて来る句だ。

広重忌をはりなき世の旅つづく

一ノ瀬次郎

作品を鑑賞する側には大別して二つの立場がある。一つは作者を良く知る場、もう一つは全く知らない場。この二

つの場の違いは作者への感情の濃淡にある。作者を知らない場にあつても感情なしで作品の鑑賞は出来ない。作品を鑑賞するという思考がすでに感情を伴うものである以上、感情と鑑賞は不離一体のものと言える。

この句の作者とは二十年來の交友がある。ある大手出版社に勤め主に校正の仕事を手がけて来た。私どもの句会報に「校正良る可し」という一文を書いて貰つたことがあつた。その中で校正ミスの一例として、一六三一年イギリスで出された聖書の中に次のような驚天動地の誤植があつた、

Thou shalt not commit adultery. (なんじ姦淫するなかれ)
Thou shalt commit adultery. (なんじ姦淫するべし)

となつていたという世に姦淫聖書と呼ばれている一例を紹介した文章があつた。関係している人たちには良く知られている挿話だろう。

翻つて毎月の春燈誌の発行に当る編集部、それをサポートする事務局の皆さんのご苦勞は、十月号以來私も身近に接して、全く敬服に値するものとみている。しかしそれでも校正ミスはあり得る。この場を借りてそのまれに出る校正ミスへのあたたかい理解を願いたい。

さて安藤広重が亡くなったのは陰曆九月六日。百五十年前のことである。

この中七下五の思いはどこから来ているのか。或いはこ

れに似た作例はあるのかも知れない。作者は今、体調を崩していると聞く。病が老来のものであるとすれば、自身「を
はりなき世の旅づく」が、幽き一筋の系にすがる思いで
ある、とも受けとれる。ただ「広重忌」がその幽き思いに
一脈の彩りを与えていることが救いとなっている。

西国の遅き入り日や曼珠沙華

吉川 隆

今年もわが家の曼珠沙華はみごとに咲いてくれた。家人
の反対を押してこの花を植えて二十年経つ。今では家人の
反対もない。と思っている。

この句上五中七がいい。西国であれば日没の遅いのは当
然である、と見るのは理屈である。数年前の十一月九州に
帰ったとき、午後四時半というのにまだ西日が山上高く残っ
ているのに感嘆した。俳句は理屈ではなく感性である。

「西国の遅き入り日や」という調べに、旅にある作者の思
いがこめられている。

曼珠沙華女の旅を彩れり

安藤 利恵

この句の曼珠沙華もいい。この花は有毒のものとして、
また古来呼ばれて来た死人花などの用例により、不吉な花
というレッテルを貼られて来た。しかしそういう先入観を
捨ててこの花を見ると美しい。旅の路傍に咲く四五本の曼
珠沙華は疲れた心を癒してくれる。この句、「女の旅を彩れ

り」に古典的なひびきを感じる。

わが索引わが手に開く藤村忌

猪腰 俊

藤村が亡くなったのは昭和十八年八月二十二日。

『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』その何れもかつての
若ものの心を擲んだ。小説『破戒』『夜明け前』などは今で
も版を重ねているという。

作者はある日ふと藤村の書を読みたく、心の中でその作
品の索引を手繰るのである。藤村忌は『日本大歳時記』に
も載っていない。しかし藤村に心酔している人は多い。作
者もその一人であろう。そして評者もまた。

月清し杜甫誦ずる媪あり

市川 玲子

知人に老人施設の介護をしていた人がいる。介護という
仕事は激務である。特に夜間の介護は、例えば一晩に同一
人によるナースコール六十回という例も常のことらしい。

しかし、と彼女は言う。一対一になってその入居者と接
するとき、彼らの本音の言葉が聞ける。その中にキラリと
光る真実の言葉を感じるとき、疲れは吹きとぎと語る。

この句、そういう老人ホームの老女がふと杜甫の詩を口
遊んだ。まさに知人の言う「キラリと光る」唱である。何
らかの用があつて訪れていた作者も、それを聞いてかねて
の心の重みがうすらぐのを感じるのだった。